

8月5日(日) 第100回全国高等学校野球選手権に、野球部主将と合唱部が参加  
皇太子さまご夫妻と高校生との交流会に、合唱部指揮者が参加

◇ 本校野球部主将・片岡太志君が開会式で行進

第1回大会からこの100回大会まで予選に1度も欠かさず出場し続ける、いわゆる「皆勤」の全国15校主将が開会式に招待されました。

兵庫県3校(神戸高校、兵庫高校、関西学院高等部)の主将は大会キャッチフレーズ「本気の夏、100回目。」の横断幕を掲げました。



本校からは片岡太志主将が堂々で行進をしてくれました

※ 新聞に掲載された片岡君のコメント

「伝統の素晴らしさを感じた」(神戸新聞)

「これまで100回続けてきたことを101回目からも変わらず続けていってほしい」(スポニチ)

「全国で15校だけが甲子園で行進できる。すばらしいと改めて感じました。100回大会で行進できるなんて、なかなかないこと。堂々とその時間をかみしめながら歩きました」(日刊スポーツ)

◇ 本校合唱部が開会式(8月5日(日))と閉会式(8月21日(火))で大会歌等を合唱

例年、「大会行進曲」や「君が代」、大会歌「栄冠は君に輝く」の演奏は、地元の大阪府と兵庫県が隔年交代で担当していますが、今年は第100回の記念大会で、オール関西の特別編成で行われました。近畿各府県から吹奏楽は約210人、合唱は本校を含む約140人が参加したということです。



◇ 合唱部指揮者・岩路彩乃さんが開会式後の皇太子さまご夫妻との交流会に出席

今年は、皇太子さまのご希望で、開会式後第1試合途中までご夫妻で観戦した後、合唱、吹奏楽、司会、プラカードなどで開会式の運営に関わった高校生8人をねぎらわれました。

本校の岩路さんは、合唱で参加した高校生を代表して出席しました。

※ 今回、交流会に出席した岩路さんにその貴重な経験をまとめてもらいました。

8人とお話しされ、それぞれ3分程ずつお話しをしました。

皇太子さま : 開会式はどうでしたか。

岩落さん : 「高校1年生の時にも参加する機会をいただいたのですが、前日のリハーサルで体調を壊し、本番には出ることができませんでしたので、今回の開会式が私にとって初めてのことでした。暑さや緊張もあったのですが、球児のすがすがしい行進と、吹奏楽の素晴らしい演奏に加え、歓声にも圧倒されつつも、一瞬一瞬をかみしめて臨むことができました。」

皇太子さま

・雅子さま : それは大変でしたね。今回は大丈夫でしたか。素晴らしいですね。

岩落さん : はい。今回は無事元気にやり遂げることができました。ありがとうございます。

皇太子さま : 歌はいつ頃から。お好きですか。

岩落さん : 幼い頃から歌が好きでしたが、中学までは、陸上やバレーなどのスポーツ中心の生活でした。合唱という形で歌わせていただくようになったのは高校1年生からで、まだまだ未熟ですが、日々楽しく活動しています。

雅子さま : パートは何ですか。

岩落さん : ソプラノです。

皇太子さま

・雅子さま : ああ、ソプラノ、そうなんですね。

皇太子さま : これからも歌を続けられるのですか。

岩落さん : 歌は、声がある限り歌うことができるので、歌える限り歌いたいです。1つのことを皆で成し遂げる大変さや大切さ、また、合唱には「何が正解」といった答えが無いので、どこまでも向上、追求していく、ということに関して、合唱で学んだこれらのことは、その垣根を越えて生かしていけたらと思います。

皇太子さま

・雅子さま : ああ、素晴らしいですね。

皇太子さま : 私もヴィオラをやっていますが、歌は体が楽器ですものね。

皇太子さま

・雅子さま : お体にお気をつけて頑張って下さいね。

岩落さん : ありがとうございます。

#### ※ 岩落さんの感想

お会いする前は、当然緊張していました。ましてや警察やSP、記者の方たちに囲まれているという、これまで経験したことのない空間で、全身が固まってしまっていました。ですが、お二人と対面し、目を見て話され始めた瞬間、不思議と力が抜け、とてもリラックスしてお話しができました。とても温かな、物腰の柔らかな謙虚なお話しぶりで、私の言葉一つひとつにうなずきほほえみかけて下さいました。お話ししてみると、当り前のことですが、「私たちと同じように普通にお笑いになったり楽しそうにされるんだ」と、改めて思い、新鮮な気持ちになりました。

お部屋を出られる際に、ドアが閉まる直前に、お二人がもう一度私たちの方を振り返って一礼をして下さいました。小さなことなのですが、そういった所作や礼儀作法、お言葉使い等、本当に尊敬しなければならないことばかりで、自分自身が恥ずかしく思われるとともに、人として求められるべき大切なことを感じ取れたように思います。

「日本の象徴」となられるお方と、その支えとなられるお方に、片腕を伸ばせば届く距離でお出会いし、ほんの短い時間でも会話をしたという事実を、いまだに人ごとのような夢であったかのような思っています。

今回このような大変貴重な機会をいただいたことに感謝したいと思います。本当にありがとうございました。